

比古婆衣

四

1 曹 5
33
4 止



比古婆衣四の卷

唱更國

伴信友稿



續日本紀小大寶二年十月丁酉先是征薩摩隼人時禱
祈太宰所部神九處實賴神威遂平荒賊爰奉幣帛以賽
其禱焉唱更國司等今薩摩國也言於國內要害之地建柵置
戍守之許焉ユエヨシと云々たう唱更の名は事由ユエヨシ以まご詳サダカお
ふ説茂きオダヤカの古事記傳ふ隼人別称のどく説をれ
たうも形が穩當オダヤカあらぬあちせられつゝふ。此ごろ
ふと史記中に見あつたりたる事はあぬに據りて考

○比古婆衣四

一

た系説のいづれを以て試に以て法しざるは其史記
孔吳王濞傳の漢文帝の時濞が封國に在て反心あり
狀茂云る下に其居國以銅鹽故百姓無賦卒踐更輒
與平賈とある茂正義の踐更若今唱更行更者也言民
自著卒更有三品有卒更有踐更有過更古者正卒無常
人皆當迭之是為卒更貧者欲雇更錢者次直者出錢雇
之月二千是為踐更天下人皆直戍邊三日亦各為更律
所謂繇戍也雖丞相子亦在戍邊之調不可人々自行三
日戍不行者出錢三百入官官給戍者是為過更此漢初
因秦法而行之後改為謫乃戍邊一歲といふなり今そ

大意茂考るに史記小のゆる踐更は漢世の制小邊
塞の戍卒を以て稱して唐世の制は唱更行更などい
ふとわがりと同し趣ある戍卒稱ありといふるか
らあとの唱更もその唐制は准へる擬び多まへ
戍卒の稱ありとぞ記さる然るハ上小擧たる續
紀の大寶二年十月云々載されざる前に八月丙申
朔薩摩多禰二國あり同紀和銅二年六月の隔化逆命
於是發兵征討遂校戸置吏九月戊寅討薩摩隼人軍士
授勲有差といえて此二件を併考る小此時逆命たる
征討たむ多禰あるは畏れ十月にわびて上る擧
て自伏せりとさきこえり

○比古婆衣四

○二

たるがごとく唱更國司等今薩摩國也薩摩言於國內要害之地建
柵置戍守之許焉シテと載らきたるは薩摩國の要害に地
小隼人を守る押の柵戍建て、戍卒を置むと奏せ
戎許へありありおの時その柵を建て戍卒戎置
あるにかの唐制に唱更の称を擬びて薩摩を唱更國
と改めらきたる戎正義を唐張守節が開元二十年に
著せる書にてそれより今の唱更と
いふるも此戎柵を置れしを大寶二年より三
十年ばらる後と當きしを時世もよく符へりあは
は國司の称ふれとすたるうへをもてかく記さ
たるふて注に今薩摩國也とあるも後よその戎柵を
廢め戍卒戎置るゝさまも替られたるにたりて舊の

薩摩の名に復さきたりける御世もありて此紀を撰
されあるが故も今薩摩國也とあるも拾芥抄改名所々部
なる法しはさき記さきたるまあり混ち拾芥抄改名所々部
に薩摩國元唱更國といふるこれあり國に成卒戎置
れり由續紀の年大寶元年の八月は律令の撰定成りた
らざる由續紀の年大寶元年の八月は律令の撰定成りた
守邊の防人此時の唱更に令制の大宰府に被接とあり
も幾母利のみ字音のまに異國に守りあるは防人を
邊の崎々戎守る義母利と稱ふべきを唱更は隼人を
其戎柵を廢めぬひ國名をも舊も復さきたる證は同
紀よ養老元年四月甲午天皇御西朝大隅薩摩二國隼

人等奏風俗歌舞授位賜祿各有差と云えて建更柵を
より大寶二年是より先小二國其隼人等の暴戾たる輩
をお堂トコロく平伏たる趣なり故以をゆる唱更の柵
伐廢ぬひ既令制も漸調ひて防人そ進にあをせて
國名をも舊の薩摩は復さきたりし所るは然るは
大隅薩摩二國隼人等云々とをちかへりて薩摩の國
名伐記され此後唱更國と記さきたるおとはあると
おくこれ薩摩國と記さきたるををても知るはし
あるのまてか

古歌にあまの海てのことよあるに諸説ありそこに
はゆふれりふと或人の語らひ出たるにをよむさ
れて考ふるまてのこと馬蛤テカタ瀉テよて汝干テ瀉テよて馬
蛤テ貝カヒを捕ふによれる言ふと袖中抄に釋ける説を海
あとにゆをれたまどゆふはこしたぐよをきとこ
ろありてきこえ又まくかことゆへ海説のあるゆ
れてまどるる説をも記せるをあのく小僻ヒカおとあ
る伐ゆま其抄の本文を擧てそ乃條々にあとより記
を但し抄の書さぬ假字がちにてふとはとみあゆま
るゝあともあまは其言を所かゝりてら真字よ換へ

て書るもあま
袖中抄第六卷あまのほてかこの條ふ云伊勢は海の
海人のまてかたのまみあみあぐらへにける身残ぞ
恨むる顯昭云あま乃ほてのことも海人の馬蛤とい
ふ貝つものとのまきあり河下のまくかこと書る本
もあまど多本にまてと書たまふそれよつきて釋す
伊勢の海は云々あの歌後撰集恋部よ見えて題書
ふ心もあらで久くとはざりける人乃をとに
古はちしけふ源英明朝臣とあり今在る諸本又後

撰集の正義もほてのこと書り

汝の干たる瀉にて馬蛤捕ふは馬蛤かまといふ
かね先細きを二岐よ造りて竹をつのお細うして
すけて持たまづ鍬めて砂の上を曳けむ馬蛤の穴と
ま汁を吐出せむそこに馬蛤のりをさし入きて引出
してとましくはといるりおさ鍬あらねど上手を
ぐせめても砂を掻けむ汁をバ吐出といへり春秋
冬とるとぞ申は夏を馬蛤横さまふありてあまハ捕
らむ馬蛤はわやう穴よ堅さほにあるなり
まてと本草和名よ馬刀一名馬蛤云々和名末天乃

加比まゝと和名抄に馬蛤唐韻云蛭音種辨色立蚌属也本草云馬刀一名馬蛤和名上同杞のま前サキ伊勢紀伊周防豊後豊前肥後おどの國人よ馬蛤とるさほを尋問ひけふにま此抄お上のまごりにひる趣と異あるこ空あき城まほ其かまさる趣をとりあつたてひをむまひその馬蛤お形状カタチハ両殻合ひて細き竹筒の如く首尾少く細く平まごり長さ三四寸より五六寸あるもあり色の淡黒ウスグロよひさくあ黄赤を包カネまり殻の首尾通トホりて内よ細身キあり其身お頭カネリる巾のごとく見ゆるをみく中に口ありて殻外

小出入を此その海中にありて潮干るときを頭を上よりて堅さまに沙中よ引入てある城海人どもその干潟よれたちてそれが引入りたる沙上よ小さら穴の見ゆるを求マギて軽歩スギアレ寄カりて白塩カタシホを穴中よ入るまバ殻を揺ウカし頭城出し沫汁を吹出ほを候ウカひて小鋤コクハカマラ鏝カマラなど城をて急ハヤく堀出ホリしてとるあり足音高けまを驚たて沙中に深く引入りまごりたきをみありとぞ或人此説を聞て云今あの武蔵の汐干の頃干潟よれりまちて貝アヒひろむの遊ウツりて見るにそお海辺の里お子などおあそびがてら馬蛤とるさほをはら同し安房上総下総然まバおれお空よても然をとたけりといへま

の花あみ。但し此後撰れ歌わゆつあかしくとく。と書
たぐへは流し。こ乃式部歌もま。く。く。こ流ま。く。く。こ
書あしたるやらんも知りか。く。く。亀鏡集といふ文を。
伊勢の室山持入道が撰あり。以て此歌入馬蛤歌甲虫類
也。或人云まてう。こといふも付て。はく形といふをい
それまて瀉と可書あり。彼入道伊勢海の邊よて能
知案内歟。

六百番歌合十五番寄海士戀れ左方。顯昭の歌にも
志ほやく海士のま。く。く。こあらねども。恋れせえき
をい。とねかりけり。とをめるふ。右方より。あまのす

てか。こ。ま。く。の。こ。云。説あり。あねをい。のやうに定
ら。ま。た。る。ふ。り。顯昭陳云。ま。く。の。こ。と。存して詠せら
あり。とて。い。る。説あり。俊成卿が判にま。く。の。こ。云
い。ふ。を。僻説ヒガコトある由い。を。れ。たり。そ。乃。難陳判の詞長
く。さ。せる。解説あ。け。れ。ば。引。志。ある。さ。げ。顯昭此歌よめ
る。時。ま。で。も。ま。く。の。こ。とい。ふ。説。を。是ヨシと心得たり。川
流。が。こ。の。抄。を。後。に。其。説。を。更。免。て。ま。て。か。こ。と。い
ふ。扱。よ。し。と。せる。趣。も。記。せ。り。然。る。に。此。い。ま。ま。あ。き
よ。の。説。を。上。に。釋。の。趣。も。か。な。ら。げ。せ。む。の。こ。ね
げ。あり。又。ま。く。か。を。と。い。へ。説。も。あ。ほ。を。て。か。た。げ

みて、其に拍をれ系説を、さらによし、おた強説あり。
 其由は次々下よ、いふぼし、和泉式部の歌を、今存る
 家集もも見えて、繪に花波といふ所を書たふと
 詞書して、歌を諸本ともにも、いりら同し、一首お意を、
 與謝の海、おちあ、みの干瀉に、海人等、お居、お波
 きたち来ぬ、おどに、馬蛤をとる、ある、ぼし、と見やり
 たる趣によみ、と、のへ、さる、あり、與謝の海を、丹後
 守保昌の具して、其任國も下りたり、事、金葉集、玉葉
 集の詞書に見え、又、家集にも、そのと、さる、ふ、お、ま
 歌を、お集、の、歌、お、次、ま、と、歌、の、趣、を、お、ふ、お、ま
 だ、丹、後、に、下、ら、ざ、り、つ、つ、前、に、よ、お、り、と、お、ま
 と、丹、後、に、下、ら、ざ、り、つ、つ、前、に、よ、お、り、と、お、ま
 と、丹、後、に、下、ら、ざ、り、つ、つ、前、に、よ、お、り、と、お、ま

せ、天、の、ち、と、立、と、よ、お、る、歌、も、え、たり、今、こ、と、論
 る、を、お、れ、お、ふ、に、お、波、は、お、謝、の、海、邊、に、お、り、と、お、ま
 趣、を、お、れ、お、ふ、に、お、波、は、お、謝、の、海、邊、に、お、り、と、お、ま
 り、お、謝、の、海、邊、に、お、り、と、お、ま
 事、の、お、ら、さ、れ、お、海、邊、に、お、り、と、お、ま
 下、ら、ざ、り、つ、つ、前、に、よ、お、り、と、お、ま
 う、へ、お、り、つ、つ、前、に、よ、お、り、と、お、ま
 り、お、謝、の、海、邊、に、お、り、と、お、ま
 め、お、謝、の、海、邊、に、お、り、と、お、ま
 上、お、謝、の、海、邊、に、お、り、と、お、ま
 花、お、謝、の、海、邊、に、お、り、と、お、ま
 お、謝、の、海、邊、に、お、り、と、お、ま
 た、お、謝、の、海、邊、に、お、り、と、お、ま
 京、お、謝、の、海、邊、に、お、り、と、お、ま
 加、お、謝、の、海、邊、に、お、り、と、お、ま

○比古婆衣四

九

奥義抄云あまを潮焼くとしては潮干の潟乃をねご成
とりてまゝに集めて其志系を垂きて焼くを言ひさて
又其をちご成むを空の方にまねくを海人の
まくかごとをいふあり潮干に間ふ急なてい空あめ
はざりける身をあむ恨むるとち免るあり

定家卿の三代集間事抄に庭訓父俊成卿先年参
崇徳院之時以女房内々仰云清輔所獻之和歌雜抄
此物得失如何一見可申中あまのまくうと書て
未勘と注作事也所習之説まてうと也海人沙中に

見馬蛤テ念キ搜取リテ之ヲ尤無暇事也仍詠之スと兼と申清輔
後日傳聞此事貽意趣云々と記さきたり此事かの
歌合に顯昭のまくかとの歌に俊成卿の判詞の中
よもいれりさてあ乃俊成卿馬蛤の説をた
ろそつぬらあのまくかたの説乃妄あるよしは
上ふまでかごをいふとて成りた海へき海まで
此のから明あまをさらしに論ふてもあらはか乃
清輔ぬし此みあらはむのオシカコト名たは歌人たち
の中よもさふたぐひ此臆説せらまるとかれあ
れ乃書どもに見えて少あらは
齋宮女御集云はくうとに海人此かきつむ藻塩草烟

はひのになつぞとや君私云頭昭のまてうこといふ
たまてと依とを記こえたりはくうこといふを
まくともきあえに又汝をる空もやくともいはねむ
何事とを記こえむや此女御歌を志ややくとをき
こえと依但證本を見るはし

まくかこと書たりしをそののみ誤寫本あり此
女御集今ある本ども初句もなまてかことあり證
本と依はし本抄この御歌は結句一本にうつぞと
るがあり六百番歌合は俊成卿の判詞よをまての
さよかきつむ海人のをし草結句たつぞとや君
夫木抄ふも此御歌を載てまてうと云々結句を
たちぬとやきと一本よちぬとやきくとありさ

て齋宮女御と申すは村上天皇の女御御子女さして
王の御事よて寛和元年五十七よて卒ぬへり
此御歌を御集に后の宮よりあまがつをこまはか
たもよ見ぬへとて奉ま給をるを返しぬふとて裳
あどきせぬむてそ乃裳よ蘆手よて浪間よりあま
のづき出る玉もおも云々あしまあし舟あら祿ど
もあふあとの云々朝夕にあまのかるもを何あれ
や云々次よ此御歌あり四首ともにあまがつよら
せて海人のうへふとりあし又藻よ裳をかぬあど
して志むてよみぬへるにてあの御歌をうへ海邊
ぬく蟹の藻塩草紙焼く煙よ寄へて戀を情をらみ

ちへふあり。但し濱を除きて。潮水は満干ある干潟
あて。汐をやく流きたあらざむを。初句を某の浦よ
あどれの流べき哉。海人といふ言の縁ヨセよりりて。海
てのこはひをれを。よくもたげぬを。て。をのしか
る流き詞流そと免ひて。よみつぐあふへあはる
べあまは。ふうくさごし申べきふあらは。此の夫
木抄よ。家隆卿。伊勢はうみの海人たりて。あまて
あぢう。うらみふ波のむまをあくとも。為家卿といへ
あしれ。海人のまて。あまのみのみやを。あひふ命の
からへもせ。行能卿。いせのうみあまのまて。あま

行のへり。くみわを。汐のまあく戀つ。新六帖よ。衣
笠内府のきのうみは。海人のまて。あまのかたつ免て。
のつくたむねあじを。しちたるらむ。と見えくる。歌ど
を。は。た。ご。あ。て。あ。ま。を。待。て。と。い。ふ。縁語ヨセふ。とりて。馬
蛤流捕る趣あを。ねよむ。ざ。は。よ。ま。あ。る。が。う。へ
は。行能卿。衣笠内府は。潮汲み藻潮たる。業流よ。み
あ。ち。を。あ。へ。あ。ま。を。い。ま。ひ。た。あ。し。さ。る。は。あ。乃。女。御。は
御歌流例タビふ。せ。ら。ま。た。る。ふ。う。い。ひ。れ。も。干。潟。あ。て
そのまを。趣よ。と。み。あ。へ。る。を。實事ヤコトふ。を。か。あ。む。あ。ま
か。流。し。

白うぶ

ある人いふ徒然草に盛親僧都が事茂のへる條よ或法師を見て白うるりといふ名を以てあつり棄りとい何物ぞと人問むけむさあそのを我も知らぬもく何らまうむ此僧の顔ふ似てむとぞいひけあともるきりこの白うるるといふそのくも茂の冊子の中難義ありとてさごのある注茂見ぬいりあらむといふふれのを注どもをいりありあむもやよりのほさぬあつて見まぐしてねがえざぬむ又

我も志らばとあつてまはつて此問にをよむさめてをれをちに件の條をむらたるとまのそ乃盛親が人のうら茂のるる中に辨説人ふ勝まで云々世をかく思ひたるくせをのりてよろい自由あつてねわのた人ふ志さうあ事あつたさま／＼放縦ある行狀ホレキテきる由茂あせせるああをせて思ふよいをゆる白うぶといの乃法師の愚に癡たる茂誹謗するふて其を漢語よ不慧あゆそのを白癡ともいふ茂白うぶりといむあせりとたこえたりさて其うるりやいへは神代紀よ癡駭を于樓該と訓ふ字書に癡を不慧也

ど注し。駿を癡マカ。空同言の轉マカまるなり。俗言にわろりマカ。也と注せり。和名抄ふ細魚ハシ。宇留里ウロリ。ひりうろハシ。うろりハシ。くまどハシ。ひ。又うろをゆあどもハシ。へり。古とろえと魚を一寸許ある小魚ハシ。あまハシ。群ハシ。浮連りて。川に汀ハシ。浴ハシ。ひて。遊ハシ。あまハシ。のあるハシ。う。ひ。や。ろ。う。げ。も。く。人。に。怕オッ。驚ハシ。く。と。あ。き。哉。童。子。な。ど。の。あ。や。と。く。渡スミトリ。捕。て。を。ま。あ。そ。ひ。あ。も。を。あ。ま。あ。り。其。が。名。を。う。り。こ。と。の。あ。も。癡マカ。た。る。と。の。名。あ。る。法。師。を。盛。親。が。む。合。は。へ。り。若。狭。ま。て。は。う。ろ。さ。て。の。の。法。師。を。盛。親。が。然。名。付。た。り。け。る。を。そ。の。意。哉。得。さ。あ。人。が。白。う。あ。り。と。ハ。何。あ。る。物。ぞ。と。問。へ。あ。哉。や。う。て。其。人。を。も。併。せ。誹。謗。

て然サる物を我もあらばをうあらまうかを云々とさ
まみたるまさぬ言ゴトとぞ起くるを依但盛親も
世ありてこの辨説を聞たらまうかをまことさら
えせ口哉むうらかうてむあう。

玉まく葛

玉まく葛といふを玉を播くよふてひあ詞あるべ
し。葛ハ野あどむむろく延ハビひ蔓ハビりて在る。其葉をよ
く風よ志ハビとひひて裏の見由むありさるハビ。翻ハビる。その
よく。歌にも其趣にちあるをいぬありされむ其葛原

通朝臣焼きて古野の小野此真葛原玉まくむあり
ありにたるあり春焼きて葛の生ひ出て夏野は繁
くあり玉播くばりあり
あり由六帖にあひがし又あいにねもの題秋萩
小玉まく葛れうはさく我をお恋そあひも思はば
萩の花は葛の延ひうあどてあるが其露あ
れ乱まかふさまに喻へてよまあせあり
も見えたるおまらをも又ねそひ合をばし後拾遺集に
惠慶法師あさぢ原玉まく葛のうら風乃うらかあし
ある秋とき小あり建礼門院右京大夫集に前あは垣
わにくばもひうう小篠うちあびく小山里を玉ま
く葛れうらみあく小さくが原小秋の初風新千載集

小定家卿ちたりわけ玉まく葛お風ふらむうらみそ
えてし春れかりがねあどそえたるあも詞をよそ
わひく葛の名乃どくともあどそえたるあも詞をよそ
をまくあるまきはめて誤写あり本の葛れうら葉
よ何ら祢ともあへらぬ野邊をあしとこそきけとと
あるも同じをまくあくとよあるはめづらしさて又
此詞のあらくたろえたるは順集よ前裁合れ歌の判
歌よああもあひきねとさる花をくた玉まく葛
のまくああもあひきねとさる花をくた玉まく葛
と云ああたる詞をとりてまくあといふよきにたま

○比古婆衣四

。夫

きりやたこゆまむそののみちやくよりひむかれ
 たる詞ありしなる法し。
拾遺集物名部 高岳相 如歌 ぬ。そやう豆と見えたるをひの
 あるものあるふりと人のひふふをよむまきてうち
 つちに考へたるやう。今世ふそやう豆とひふもの
 なる法し。そはそやう豆とひふよす。今世の詞ふ
 人を褒て悦ませむとて。其を事々しく言擧ぐる法。
 不免そやまといひ。其なる人の志うをむとほる事を。

強てまむるやうの事哉。そやうたつふあどもひあ
 たり。今の世ふ豆をう乃川ねのどく時く事をせて志
 むて萌^モやうて食料とまぐる法。そやう豆とひふをむあ
 へそ。そやま豆といへふなる法し。古書よそやまとい
 此そやう豆といふ意にあたる法し。古言見あやまらぬとい
 此のあらざるなり。字鏡集に鑑字の訓は。豆とひふは。豆
 此字説文に。一曰。心悶と訓。を拾ひ出。て載るが見え
 書に。其は。漢籍に。施。た。る。訓。詞。を。拾。ひ。出。て。載。る。が。見。え
 て。其。は。と。り。た。る。字。義。訓。詞。を。拾。ひ。出。て。載。る。が。見。え
 だ。姑。く。其。書。に。當。ら。ざ。る。も。あ。り。き。此。の。訓。は。豆。と。ひ。ふ。の。類。も。あ。り
 う。世。に。熱。く。動。く。と。ら。ぬ。と。同。語。あ。る。法。し。但。し。萌^モやうむる法。を
 心。中。に。熱。く。動。く。と。ら。ぬ。と。同。語。あ。る。法。し。但。し。萌^モやうむる法。を
 り。け。む。と。ら。ぬ。と。同。語。あ。る。法。し。但。し。萌^モやうむる法。を
 ふ。そ。や。う。と。ら。ぬ。と。同。語。あ。る。法。し。但。し。萌^モやうむる法。を
 や。ま。も。ひ。あ。げ。む。と。同。語。あ。る。法。し。但。し。萌^モやうむる法。を

○比古婆衣四

○七

ふ例をやり豆といふもさうからず。

續日本紀此中於る古記錯乱の文
國史を印本はさらふて諸本互に誤字脱文あまむ其
諸本どを校合せて訂してよむべきさある中
日れ千支ふを次の混む多かる哉ふとよみくは心つ
りぬものあまむ長曆通曆あどもを引合せて正して
讀べきあり故己年おろ蔵てる印本哉をとりて異
本どに以て校書し人のをれさるも借寫さるや
まばさるをたが其國史此異本のさあらば他の古書

どもふを考合せて訂すべくねをひねきてくねふあ
かたさざあおらゆりてよく訂して校異あといふ趣
あるそのをぶに書記し見むとあくるさしてあま
あるやどにむあしく年老てくち哉しくこそ此ら
或人續紀の中より日の干支疑した處をいさく
書出してゆに校正せるものといゆる中小更に書
注し見せざる一とあり

續日本紀一卷九印本二十行 神龜元年三月の下に庚申定
諸流配處遠近程伊豆安房常陸佐渡隱岐土佐六國為
遠誼訪伊豫為中越前安藝為近とあるを六月の下に

あるべきがあくに混入せらるるなり。其まづは是月の初
日。庚申朔。天皇幸芳野とありて。次々小甲子。日五辛巳。二廿
日。壬午。日廿三此條事。茂記て。次々亦件の庚申。此文あり。
上小庚申朔ありて。再庚申あるべきは。何らに。今此干
支。此混を考むと。拾芥抄下本に。遣流人國々。伊豆
安房云々。と件此紀の流配處。其遠近乃十國を載て。神
龜元年六月三日定とあるによりて。この月日。茂此紀
の六月。は。索ふに。同卷廿三。張左六行諸本。庚巳云々とある日を。
日本紀畧に。庚寅と作り。庚巳の干支配偶をべき理あ
らうへ。是月。戊子朔。よて。庚寅をあたち三日。は。當

まむ。拾芥抄に。六月三日定と見え。るが。此流配處の
條事に。全符合へ。然まむ。紀に。三月庚申として載ら
れ。る。も。六月。此庚寅の條。小在。は。き。が。庚寅。茂。庚申と
誤りて。三月の條。小錯むて。入。る。あり。但し。この條事。
續紀の諸本は。さらよて。類聚國史八十又紀畧。も。も。三
月。庚申に。係て。載。る。を。ね。を。へ。む。心。と。既。く。より。干支
茂。誤りて。三月の。下。は。錯。ひ。入。る。を。拾芥抄。も。を。
他の。正書格文。あ。ど。より。採りて。載。たり。け。む。が。た。の。川
から。此錯を。訂。を。證。せ。あ。る。か。川。そ。乃。六月の。庚巳と。あ
る。も。庚寅の。訛。ある。傍證。せ。さ。へ。よ。あ。ま。る。なり。

をのしといふ言れ論

をのしといふをそと感賞^メる意の言あるを侮弄^{ア+}る意
小轉^ツしてもの言とたこゆふ感賞^メる意にいもの
たの言れ假字^ツ古書にみえざゆふよりてはやく或
説る侮弄^{ア+}る意のをのしを古書よ可咲を阿奈乎加之
と書る或證とにべし感賞^メる意にいものをたむのし
此畧語あるはけきむたうしきささむはしといふる
はいをれきる説のおとたこゆきどよくたをへむ其
説とわりつたかとありてうちうとふあるくよ後

よ又ある人々の説よ其を侮弄^{ア+}る意にをのしをいふ
がとよて感賞^メる意よを轉^ツしてもの言ありといふ
るぞねむねを然^ナふあくとたこゆきど其説ねろそ
かふしてたがよをしを今れのまがねをひとまふ
趣^ツたりにたまるむとにさふを侮弄^{ア+}る意にをの
しといふを感賞^メる意より轉^ツする言あつら假字の證
あふに因^ナりてかよさまよ其言よ據^ツて論ふはし
てその侮弄^{ア+}る意にいふるをのしを新撰字鏡よ可咲
見醜^ル白阿奈乎加之まを釋日本紀よ神武紀小兄猾等
を討つひたる條よ皇軍大悦仰天而咲因歌曰とある

歌詞の中に阿々時夜塙とある哉公望私記を引て阿
 阿咲聲也時夜塙猶言乎加志と注を引て歌詞の意を釋
 けるを當せりともたこえざれど其説ハ別本文此咲
 字何るよはきて乎加之と釋ける言をあるをり古
 よて字鏡此訓と相符へり字鏡を寛平四年に撰たる
書あり公望私記を延喜の
 ありまゝ類聚名義抄もて可咲をたゞにヲ加シととみ
 まゝと唾々然をもあるよ免り此名義抄ある訓言假字
の違ひをさし
 ありまゝ旁證もを備ふべし此書此事を本書の考に注あり唾を詩も唾其笑矣
 説文も唾大笑也他字書どもふたゝに笑也笑自
 也あと注へるよとれり訓さまあり遊仙窟も唾々然
低頭而笑ととめ

り。唾を唾字さて咲を笑と同字よて唐韻に欣也説文
の古體あり
 む笑喜也喜を叙古も喜樂増韻に喜而解顏啓齒也又
 嗤也嗤を玉篇も悦也我則笑とある哉毛傳も侮之也あとを注へり正韻も微
と注あり又詩も顧
 喜而解顏といふる趣れ言より侮弄る意ふも轉せり
 とたこゆゑを其意得て皇國言にとりてをたれ乃づ
 かられわのささる言のひあるふあをきて乎加之
 今昔物語集廿二卷
第三語に房前公の事哉
 此大臣ヲバ亦可咲門ト申ス亦河内ノ大臣ト申ケリ
 其レハ河内國澁河ノ郡ノ郷ト云所ニ山居ヲ作

リテ、微妙ク可咲クシテ住給ヒケレバ也。真字の傍、此書よをあらば、全篇、我よみ、こゝして、其意を得て、例より、訓るあり、さて、此公ハ、天平九年五十七歳、ふく薨た、まど見え、とる可咲ク、感賞る意の言、て同書中、然書ぶが、おほあり。
言づ、つ、ま、同書同時平、大臣取、國經、大納言、妻語中、可咲キ、事共語り奉リケル、次ニ、平中云々、大臣心ノ内ニハ、可咲クナム思ヒ給ヒケル、國經、大納言、見えたるを、上の可咲ク、感賞る意のを、おしく、て、下あるを、侮弄る意、れを、おしく、あり、かく、同字、同言、我あらべ用む、ても、事、の、趣、に、より、て、れ、の、川、から、混、ひ、ふ、く、わ、あ

是れ、こ、ゆる、我、ち、て、も、知、る、感、き、あり、真名、伊勢物語、有、乎、見、而、と、かけ、此、書、を、假、字、違、も、あ、る、書、か、ら、さ、は、る、に、古、き、う、た、だ、ま、も、収、め、ら、ね、む、か、き、へ、の、證、と、さ、は、し、さ、て、又、靈、異、記、の、序、に、後、生、賢、者、幸、勿、強、と、書、て、訓、注、又、幸、ヲ、か、び、ク、モ、と、あ、る、も、幸、字、を、侮、弄、る、意、は、叶、ふ、あり、又、蜻、蛉、日、記、小、み、ち、の、く、ふ、を、お、し、か、り、あ、る、所、々、我、繪、ま、か、た、て、て、れ、が、り、て、見、せ、む、ひ、け、れ、む、み、ち、み、く、乃、ち、あ、の、嶋、ま、て、見、ま、し、う、む、の、小、ほ、く、し、の、を、お、し、か、ら、お、し、と、困、に、ひ、び、お、け、て、よ、め、ぶ、も、感、賞、る、意、れ、を、お、し、あり、但、し、此、日、記、あ、る、歌、も、乾、く、を、河、伯、む、の、り、と、が、お、ほ、ま、き、に、あ、ら、ば、か、べ、ま、す、曾、根、好、忠、集、に、て、の、雅、し、た、よ、り、て、證、と、を、べ、し、ま、す、曾、根、好、忠、集、に、え、よ、わ、ち、ね、ど、ち、く、急、む、梅、の、花、を、こ、そ、我、も、我、の、し、と

折てかゝるむきと載たるふ此集の首詞ハシメは花の急
るをみまむ誰もをのしと見るらめど人をかゝあき
か布をほくす我をはかあき言コトをたごしねきて云々
とひするも件の歌と同趣詞よてとをも感賞メヅる意
持をのしに之其を急むにかああをせたるなりさて
急むを心ふれでて成のしとれそふあまりふ顔にお
らむれてにあやのある成の多續紀淡路廢帝卷に記さき
たる藤原仲麻呂を褒賞たふひて押勝と名を改賜ひ
姓中に惠美二字成加へて藤原惠美と賜する事成水
鏡よ急みとひ希姓も御覽ミざるたびよ急ましくたが

をとしてたまをけらるとぞ申あひきりしと云えたる惠
美あれよて其急むあやりに聲を出ををわらふとい
ふ成其急むもわらふも侮弄するうに轉してをひ
るあや故咲字成ヲカコともエムともワラフとも通
はして訓来たるあり可咲を乎加之とよ然るを上よ
攀をるがごとし又笑を名義抄
和良エムとよ和ラフともよみ字鏡ニ志の急を今此俗
ふを侮弄ナゲる意のかたに急みをのしといひにらふも
ねわくはさるるのよ希急まばまだらちしくきこ
ゆ急なりけ急をかあしといふもそと心よ志とて懇ネヒ
切コトなれをふ意急言急成轉して悲哀カナシむうにのみ

のむをいむをを深く愛する意の言ある或惜むの
たふれみいあがごとく例も同じたれむ感賞る意
れをいもかの可笑れ假字によりて乎加之とさご
むれいまあや感賞る意にをいといる言れ古
れそのに見あつりたるを伊勢物語よいさうとのい
とをのいげあまけるを見をりて又聲ををのいりて
ぞあをれふ歌ひける又いさかあく城りりがりた
まひて使に禄給ふりけり伊勢集の首れ日記文よ前
裁のをいかまれむ洞物語俊蔭卷にをかうり
もいりあどあ回ありあまられ後のあみよは數志

らばれなくはのふ詞とあまり

安米都知誦文考

ある遠き國人の源順朝臣家集にあめつちの歌とい
ふがあふををあめつちわいそら云々と音れかた
りてはくいとくのるたる古文れありいとあるく其
を考てきたあといありとたこゆふ由をくなく考
出たる説ありそこよをいあふり見つふといひれあ
せふにれ乃是既にサキにか乃集れよみ見たる時を一を
ぢたてきうこのあいにむとれをへ海時よて

あべて歌ぞをふ心のまざりけれむ。そ乃あはれ
の歌。以のあるとあらむとまでをたげねも見はて。歌
ぬしのあべて歌よ似む。以のあまむさばかりは
あげなるよとのみねをひてうち過ぐ。あはれ
あよ後に假字本末といふ書記する因。うの物語
に手本を書ぎま残るるところ。詩にあらべてあ
めつちといふあはれと乃見え。あはれをくはれ
みざる誦文のあり。よやときとゆるう。あはれ
ありきて。か乃集のあはれつちの歌。あはれ事。の心。ううび
つれど。傍^{カク}あはれ事。あはれむ後。よそとさ。あはれき。ううつ

が。い。い。い。の。う。ち。忘。ま。て。あ。あ。け。い。い。い。考。説。以。ま。ま。あ
し。い。う。て。と。く。見。せ。て。よ。と。答。や。あ。つ。あ。が。年。月。經。ふ。あ
ま。と。ね。と。も。せ。ぬ。よ。老。ら。く。乃。ま。ち。ど。ほ。に。ね。あ。て。か
の。集。と。あ。出。し。見。て。あ。ま。あ。れ。考。合。を。る。よ。以。を。ま。あ。し
た。こ。ま。あ。い。ご。く。る。ま。よ。く。あ。く。は。書。記。し。試。し。以。後
ふ。か。の。人。あ。考。を。み。て。あ。し。同。ト。か。ら。む。よ。ま。此。考。ハ。捨
け。た。し。か。ま。よ。く。む。隨。ふ。た。し。又。あ。の。み。ふ。え。ら。む。あ。を
せ。た。ら。ま。よ。は。と。く。あ。ひ。ま。る。考。と。あ。る。た。く。や。と。ま
ま。か。く。ま。れ。例。の。こ。ろ。や。り。此。を。さ。び。に。あ。そ

天保十二年正月廿七日

源順朝臣家集云

此集三十六人集本と歌仙家形も

ある詞あり又誤字脱字此ありを今校へ合せ
て誤とあるたよきをとり以けまともさ
め誤なきを右旁に書そへ又左旁は
ま真字茂書そへて讀やすからむ

あめつちの歌

四十八首

とと藤原有忠の朝臣藤六あむと免海へへあ

まかまをのみみかぎりもそ乃をト茂を忍たりあ

きはしもにもす忍とたをもわのちてよ免る

春

あらさどとうちのへをらんをやま田の苗代水よぬ

れてゆく系あ

免もたる小雪まを何をくなりよけり今日こそ野邊

の若あつみて免

はくを山さける櫻は匂ひをむひまでをらぬどよそ

あがらまひ

千くさふもわころふ花の匂むのぬいつら青柳ぬひ

し系をぢ

わのくや明石は濱を見こそせむ春の波はけむつ

系船はわ

志げくさへ梅は花がさふるたのぬ雨よぬまどとき
てやかくま

そろ寒み結び氷うちつけていまやゆくらむ春は
たのこぞ

らよそのまきくもかきふ冬夜秋は野のそえにけるの
蘭 小山田のちらい ねさわの山けら

夏

山を野も夏州志げく成にけりあどりまごーたやど
ねのるうや

待人を見えぬを夏も白雪や猶もり志けあこー乃志
らやま

のこ恋に身をやきけくを夏虫のあわれこびーた物

浅ねそふの

を川のふも思むのけてをゆふたをた賀茂は河波立
よらどやを

身浅つ免ば物思ふらー郭公あき乃みまどふ五月雨
ねやみ

祢をふのみまどあらをまぬあやめ草人を恋ちよえ
こそをあまね

たまよより心乃るせぐも何らなくふあさく心む
あまねあまねさにを

庭をねむやあまねてねひて荒に々りからくしきだふ

君がとちぬに

秋

呉竹のよさむに今をありぬとや。ありそ免ぶりに衣
かゝしく

寂上河いふ舟のみはあをばて。おりおが_下あわさ_上

こぐあし_鴨のそ

昨日こそゆきて見ぬやどい川のまにうつろむぬら
んのべ乃秋萩

ア_んう_んたうも名のそありけり秋お野乃千艸の花お
ふもねとまり

結びたきし志ら露を足る物あらむよるむのほてふ
玉をおよせむ

ろも_櫓のぢも船をかよむぬ銀河_{アノガハ}たおむこころはわど
やいくひろ

木のちおみふりく秋を道哉おみこころぞらぶる
山川おそこ

今朝もねむうつろむおけり女郎花。こまよまのきて
秋をばやゆき

冬

日をさむる氷をとけぬ池_{おれい}水やうへまつきあくふの

たつねのこひ

とへといひし人ありやと雪分てたづねきつゝあぞ

三輪の山本

いづこともいさやあら波たちぬきてあつめる草に

あけさくそけい

ぬふごとくに夜をのへを冬の夜は夢にたふやを君が

見えこぬ

うちわたしまつあどろ木枝の空ひを乃たえてよら

ぬをあぞやろろう

履びゆみのをさるよをあらでちる花を雪かと山に

いふ人ふせへ

をみあまのそえこそあされ冬さむえひとりたもひ

乃よあいのをねむ

急ごひをる君がはしたの志をかき乃野よあをち

そをやくてふす急

思

夕さまむいせぐさびりた大井川かぐさ火あまやき

えのへりそゆ

己をれずもねをわゆるか肌朝あく。祢くろのみ

乃ねくされねむ

さくがふ乃いを蜘蛛にやまくなぬころを夢よえ君に
あひまぬがうた網寝兼
るり草の葉はわく露乃玉残さへそのおもふ時をお
ろり瑠璃とぞ見えは
思ひをもあむ残をせ恋ぐみドのイみそをとひとがとあて
てをら後るてはわ祿唯く
吹風にのりても人を思ふよまあまのそらふえ有や
とぞ思ふ
せをふちにさうごま川の成ゆくはみ残さへうみに
思ひこそあせ瀬淵 身 水脈兼 海

芳野河そこ残いも波いもで乃みくるーや人残立居いとて
あふるよおもふ

戀

えもいもで恋残みぐるく心のぬい川とやのちふた
あまの川がえ松
残るあくわつ涙を露けき残のびら結び草むら
み野乃
えもせのぬ涙の川れをてくや志ひて恋した山は
つくむえ
をぐら山ねがひうあくもあひぬらぬ本う生うむの

里恋しき物哉
 おれたむ涙を袖よこしし乃ひふまにだふえ何
 ひみてしがあ
 是うしにもあらぬ我こそ逢あとれどそしのおひ乃
獵師もえこのれぬき
照射めてをひふしてもこふふのひをかく影あさまし
 くみえぬ山井
 照月もそるく板間のあをぬよえぬきこそころされの
 へはろちも手
 今ま川件の端詞は意哉按ふふにそ乃のみ四十七音

戎物事言にとれ履てあめつち云々と唱ふる文
 のありて其發端は言哉とりてあめつちと称ふの
 言けは哉そ乃文より藤原有忠朝臣と藤六
 と二人して歌による是た言けは順朝臣其返りに
 此歌はみぬへよありありの集れも有忠がよみ
 小めするによつぐとて異體は歌十四首あり
 ことつちの歌をみぬへは似る趣ありその歌の
 ことには下に云ふ法しさて有忠朝臣の名を諸本假字
 みて書るに本院願寺本に有忠と書る依りて考ふに
 尊卑分脈閑院家流に恒佐天慶元年五月薨六十を
 の四男有忠左馬頭從四位上卿と云孫弘経朝臣
 藤六も同書有忠權中納言藤原良卿と云孫弘経朝臣
 部三男に輔相無官藤六歌人と云遺集作者部に六位
 ぬ乃藤輔相七首載られたる悉併諧のさきたる部にあ
 比古婆衣四
 廿

口つきに本なり其の中あ三十九人集の首に人九集とてあ
る中なき所に入丸あ三十九人集の首に人九集とてあ
おとるに本なり其の中あ三十九人集の首に人九集とてあ
十餘の国名物たる中俳諧大相歌を載せしむるも同
じ口々に件との書系歌の戯れ公卿の名金玉集に詞書たり本
人の云々との書系歌の戯れ公卿の名金玉集に詞書たり本
志ろ清輔も朝臣の袋草紙に本卿の名金玉集に詞書たり本
まれと集るもお乃の草紙に本卿の名金玉集に詞書たり本
た六人の集るもお乃の草紙に本卿の名金玉集に詞書たり本
え侍ふかへ新拾遺集と恋部あ此が心と歌の撰集にて見
りあかへ新拾遺集と恋部あ此が心と歌の撰集にて見
ふあかへ新拾遺集と恋部あ此が心と歌の撰集にて見
まあかへ新拾遺集と恋部あ此が心と歌の撰集にて見
は入治られざる物に今もむ心と歌の撰集にて見
り又宇治拾遺集と恋部あ此が心と歌の撰集にて見
あり又宇治拾遺集と恋部あ此が心と歌の撰集にて見
あり又宇治拾遺集と恋部あ此が心と歌の撰集にて見

どお家あふらむ歌よみあへどうや藤六むのそ
ま阿弥ととらよの誓よみあへどうや藤六むのそ
そ阿弥ととらよの誓よみあへどうや藤六むのそ
菊云々藤六相良朝歌合ア獄前由美之為題此菊可
テ詠一首獄門内相良朝歌合ア獄前由美之為題此菊可
菊云々藤六相良朝歌合ア獄前由美之為題此菊可
免之云々あまうり色今推考のあらぬ囚放縦に賜ら
は藤氏これたて六の位ある寺本歌あらぬ囚放縦に賜ら
名藤氏これたて六の位ある寺本歌あらぬ囚放縦に賜ら
の藤氏これたて六の位ある寺本歌あらぬ囚放縦に賜ら
傳れ部に藤六の巻と見ゆるか
心ゆるあめはあちの歌と見ゆるか
めつちの文を一とつ改策乃まに歌毎の起句
の上も急てよみたりける残順ぬそ是小競ひて

○比古夢衣四

○世

さらに其をトを起句の上と。結句の下とふを急て。四
 季と思恋ヲ六題に分ちてをみるるあり。然志ひて
 るが故に。歌がまどく。れちばうとあり。三十六人集
 の古本に載たる此ぬ。よ集ふ。雙六番の歌。これハ有
 忠バをみは。トたる。に。よみ。く。と。て。雙六盤の界れ
 形よ。歌詞を。書。け。ら。ね。て。豎。横。より。廻。ら。し。て。よ。み。と。ら
 乃。ふ。る。と。次。の。田。疇。形。れ。と。き。趣。又。書。あ。し。て。よ。み。と。ら
 一。よ。む。と。次。の。田。疇。形。れ。と。き。趣。又。書。あ。し。て。よ。み。と。ら
 其。れ。た。る。が。故。に。ぬ。て。よ。み。尋。常。の。歌。口。も。多。れ。と。ひ。て。よ
 ら。し。め。ら。る。が。故。に。ぬ。て。よ。み。尋。常。の。歌。口。も。多。れ。と。ひ。て。よ
 下。の。書。そ。ふ。け。し。み。さ。て。件。此。歌。の。次。第。ヲ。ま。く。に。起。句
 上。の。を。ト。残。の。結。句。も。ト。下。書。け。ら。ね。見。る。に。か。く。れ。お。せ
)

あめつちぢうそらやまかをみねたふくもきりむろ

おけひとひねうへを急ゆわさるれふせよえのえを
 あれおて
 然る小恋部えの位よえもいをて云々。れふる松がえ
 と有て。次よのありあく云々。そ乃次に又えもせぬ
 云々。山をつくむとありて。四十七音の外にえもト
 歌一首ある也。相摸集なる此あめつちを急る
 歌も。然系次第に見えたるがうへふ。其歌どもハ。下
 づらふ。此順集の歌此題の下に。四十八首ともあれむ。
 全文よえもト二川あ系又合へり。さゆをひのあるこ
 と小う。さらに心得がと。志ひてたをけてひちぐ。え

一くハあめつちわーそらといふごとく二音びくや
 能へて四音を一句として唱へむるを四十七音よて
 を一音足らざれば其句残とくのるむとしてえ音を
 一つ助へて唱へあきたるにをやあらむかへむく
 心得ごとたことなりさて又端書ハシガキにあめつちの歌と
 書るはあめつちと称イふ文を首カミと尾シモとよむ急てと急
 歌といふ事あり此あめつちくもきり云々といふ歌
あとなりいろは歌を昔の今様といへる歌とを
風あり委しき事を既に假字本末に論るりかくて又
 相摸集よ云花山一條の御
 あるところよ庚申の夜あめつちをかみもふく

とむとてよほせー十六首

春

あさみどり春めづらーくひやあわに花のいろまは
 くまあおのあえ
 つきもぎぬ子の日れ千世茂君のためおひむきつま
 む春れ山みち
 かのよりは乃どけき宿の庭さくら風のおくろもそ
 らにまくらー
 そ乃のさやゆくへあらるく春あらむ関を急てまー
 春日野のちら

夏

やどちのた卵の花うげを波あまやれをひやらるる
雪のあらしは
かさらむをみあちてそ時鳥きくあがらだふあ
のぬこ急をば
みしまえの玉江れまこも夏がりになげくゆきうふ
をちこちれあね
たぎのせよよどむどたあくこそぎせむみぎを涼
たふ乃あごうに

秋歌 闕

冬

むしの祢も秋をたぬまは草むらにありぬる露れ霜
雪まぶあろ
あのももる時雨むり乃あるゆとは軒れいさまも
あらしと思ふを
えこそねる冬の夜あなく祢ざめりてゆえまさるの
那袖乃こわされ
えごさむみりをねる雪れきえせねむ冬と見るのあ
花のとねを成
今按るにあめつちれ文を歌の首尾にまゑてとるむ

よを二十三首に一言餘をり相摸を其中三十二言を
得てよ先海が今本小秋歌四首缺て十二首あるあり
此のハ他人のよみたりあるはし順集ありあは
書よ有忠朝臣と藤六と二人かくて其十二首の首尾
よよまれきる由えたりかくて其十二首の首尾
能音成書けらね上よ奉たる順集ある全文よあて
其を字を圍みて別ちよあにやくはごせ

あめつちわしそらやまかをみねたに缺四首むろ
こけをとの歌本よこのをも云々あらしと思ふ
あるがうへに結句の意もとわりてきこえはさふ
ハあらうこそふけけ写誤あるはしかく正をとき
に合文此詞
ひとぬうへを忍ゆわさるねふせよ

えのえをなれわて

かくはば順集と文の次第は異あると又連語の異あ
ふところもありとを見ゆまどをや同文あること知
るはし洞物語ウツホ卷國禪ふ仲忠此書て孫王に奉まる御手
本此書さま成以するところ春の詩夏此詩あめつ
ちとええするも此あめつち乃文此事あるはし但この
物語本どもあめつちの下にその字一つ禪たり或校
本にあきぞよた本書成よくとみよきまへて知はし
此物語も天徳此頃カキ作たるを乃ありとえゆまは順ぬ
し此みさのりにねまし頃あり一華堂切臨が源義
源順ぬしの作ありと天禄元年よ源為憲朝臣の著
へり據ある説なるに

○比古婆衣四

○共

さきたる口遊クチスサに四十七音此誦歌を載らきて其詞を
 いであつむむれをぞきこめすと云々と長歌のさま
 によみたるを乃ありこの歌を別下注に注を添
 今按世俗誦阿女都千保之曾羅也万訛説也此誦為勝
 と見えたるをこまあすあの口遊志るされきる天禄
 當まりいちゆるたね元年を順ぬ一六十歳の時よ
 ちの文とくもよ世相模と行たれた言しこと志る添
 又加茂保憲女集に頃此人ありよむひ星の以々ま
 くわう雲路此あし夕なまほあらねむうたこと
 もあらまほ以まをままといふ空もあくまま逢
 ふ曉の涙をねとしたる露をあつ免てうけおしふみ
 をのたちしめけるよりあむ河めつちわしそらと以

むけるをまほは志けるといふ海もまここれあり但
此集れ文のきさま拙あげてとわりこきこえがと
たとろろ多しあくまあめつちれ文の事をいへる
をりかとみふ證とを添しそもく此あめつちの文
を千字文あどいふと乃々さまにあらひて作するを
 新ふしてあめつち地よりくもきりといふる迄事も
 あれをむろ天こ地けひ人といぬ雲うへ霧と聯らぬとあ以
とせむう室こ若あけありその次あるゆわさるより以下
をあふ事ともたこえがとし志ひてそてつあてよま
 ばよみもしめるれど河ありようこをにいたあれ
 成上し引出たるがおやぐちやく口遊おもそれと載

○比古婆衣四

○世

らまを誦歌に比べてを劣さぬに論をねらふ然
るにそののみさをのり世々も唱へられたりけむこ
とあそあやけま

太為余歌考

太為余歌ハ四十七音成詞ふとのへく長歌此さま
誦む法く作するそ乃ある成源為憲朝臣の口遊クナスサ此
中此書籍門に載られたるこの口遊此本書の尾張國
三年の古寫本を幕して前本とせり卷首に長
口遊序竊以左親衛相公殿下書生為師讀李嬌百廿詠
矣天性聰敏習之餘或有遊戯々々之裏間有歌謠蓋是
矣

年少之難致也彼韓櫓帶刀之歌優則優矣終非吏幹之
備也文故老之說可用則家難拋巷之類或直欲令
籍分門其詞或欲令郎於底之常為其體或直欲令
上賢郎於俗也願為此卷於掌底之常為其體或直欲令
郎近於言也為小郎而作僕夫源為憲序とあり於時
遊元弘長三年二月廿七日僕夫源為憲序とあり於時
于時弘長三年二月廿七日僕夫源為憲序とあり於時
少加愚筆畢と記せり序ハ左親衛相公殿下書寫之少
を公卿呼左大將相公ハ大臣唐名殿下と攝政の
に公政從二位右大臣兼左藤原朝臣伊尹公謚謙
徳公あり第一位上親賢朝臣に當り此本書古筆と
兵衛佐從四位上親賢朝臣に當り此本書古筆と
以て誤字は本書に臨むる字體が趣成り見合せ又其
を誤字は本書に臨むる字體が趣成り見合せ又其

轉訛戎推考へ。彼此考訂してあゝに擧げ、本書此誤脱
おどを其字下分注して後の考小備ふかくて其歌
詞を考るにあや其意さくのひてをたこえざまども
とよりのかゝる歌あど作らむ事を以て難きわざあれ
む其心志らひしてたほうごによみと起てあふ法し
さて此をいま太為余歌といふを、伊呂波歌といふに
倣ひてあす

九雜曲 書籍門 序 九門 三卷中 分門 八門 中載 九十
畧 誦 歌 此 上 二 字 本 書 二 百 七 十 八 曲 名 曰 口 遊
中畧

太為余伊天 本行太字本頭歌の止行此上頭の分注乃左
書支美女須止 本止美を差と書り安佐利於比由久
言の句調へ音字本詞を考へてを今らく比字のへ七
補也末之呂乃 本書之り字知恵倍留古良倍字本書毛
波保世与 本字と書喰ありて心かくの衣不祢加
計奴祢と書 謂之借 二乃六字分注あり之借
今案世俗誦阿女都千保之曾羅也 阿字本書虫食
里如心とゆ羅也万の三字を本書訛説也 本書説を此
誦為勝 俗誦文のあめどちほ乃太為余伊天云々
○比古婆衣 四 玆

まりりとい
 太為余伊天也田井小出であり。奈徒武和礼遠曾也。菜
 摘む我をぞあす。支美女湏止也。君召をとあり。安佐利
 於比由久也。求り追ひ行く所也。末之呂乃宇知恵倍
 留古良也。山城のうち。宇知の地。醉へる子等あり。毛波
 保世与た藻干せよ。衣不祢加計奴也。え船繫けぬまで。
 えハ船残曳く聲あふ残。囉詞のおとく加へく詞をと
 とのるより空死こ也。一首此意をさざりふと布す
 もきあえざれど。為憲ぬし乃論をきたるがどく。あめ
 つちれ文よはひさく。の勝れりといあべし

玉蜻考

萬葉集の歌ふ玉蜻蜓。玉蜻。珠蜻。あど書るを。前の人々
 カギロヒとよみ来きと。蜻蛉をかギロヒといへる
 ぞ。ねのまを夕。かギロヒとよむ。ほく。たも。ふる。よ。あ
 る。浅い。を。む。と。は。其。ま。ま。づ。本。草。和。名。よ。蜻。蛉。一。名。諸。乘。
 一。名。胡。螯。一。名。即。蛉。一。名。狐。梨。一。名。阜。蝨。一。名。青。亭。一。名。
 胡。黎。黄。小。而。一。名。赤。卒。赤。小。而。一。名。絳。騮。一。名。赤。衣。使。者。一。名。
 赤。牟。丈。人。一。名。青。蛭。一。名。廬。劉。和。名。加。岐。呂。布。と。え。加。岐。
 呂。布。の。岐。濁。音。に。よ。む。べ。決。む。下。と。奉。る。古。事。記。に。漢。名。
 藝。漏。肥。と。あ。る。み。准。へ。て。決。む。下。と。奉。る。古。事。記。に。漢。名。

○比古婆衣四

○甲

ちて見ゆるものあり。但言の物の状を譬へてや。の目此如しといふも思ひ合せらるる。三日月不食則化成青真珠と云へるは頭目の貌より。童のやと云ふは頭を撮取て青玉ありといひて。合せらるるかと思ひかくてその萬葉に見えざる歌ども。茂左の目やまくららる奉て證し論ふ。但し歌詞の頭に數の字茂注ぎるは互に見合せあどして考ふ。淺き便とせるあり。

一 玉蜻髻タマカギホ所見ホカニ而往エテ兒故イニ余コトのニ万ニ十ニ二ニ卷ニ廿ニ七ニ丁ニ〇ニ一ニ二ニねり

五六九十一の歌は蜻字を用ひたり。万葉二卷十

卷二陽炎茂蜻火九卷に蜻蜒火と書て蜻蜻蜒ともしにカギ口小當て用ひたり。そを下は奉るを

互に見あをせて證し。玉垣入風タマカギル所見ホカニ而去エテ兒故イニ余コトをニ万ニ十ニ一ニ卷ニ五ニ丁ニ〇ニ一ニ二ニとニ同ニ歌ニ

三 小多万可岐留タカキル七 八 小玉限タマカギルと書あまをりて相證して。乃玉垣入をカギルとよむ。但し垣茂カギ小用をるハ借字の訓言此清音を濁

音に借用ひたり。集中に例あり。まさ万葉二卷に蜻火と書る。或本は香切火と書る。同例

小通はしり牙依證と志法し。かきろひの事を下
 三多方可岐留波呂可介美縁互伊述師古由惠迹。此を
 記上卷第二縁にええて。一二の句をみり。三と
 四玉蜻蛉鬚髯所見而別去者。万八卷三十四丁
 万九卷三十二丁。蜻蜒火と書て。蜻蜒をカギ口に當
 てて書互に證とほべし。
 五珠蜻鬚髯谷裳不見思者。万二卷三十九丁
 以上五首蜻蛉此中空飛さまにとりて。鬚髯ま
 た遙ふあどしり牙依那。ほくら辞あがら其さほ
 下此詞まで應たしり。

六玉蜻夕去来者。万十卷五丁
 七玉限夕去来者。万一卷廿一丁長歌
 右二首蜻と限と同言の系證上ふのするがあと
 一。蜻蛚を夕にあまむ蚊あどを食をむとて多
 く中空飛えぐるものあれむ。然しするまで夕
 さりにあけしあまくら辞あり
 八玉限石垣淵乃隠而嬌。万十一卷十三丁
 九玉蜻石垣淵之隠庭。万十一卷三十二丁
 十玉蜻磐垣淵之隠の恋ほく在系に。万二卷卅七丁
 以上三首蜻は水上に集たて。萍あどに下りし

○比古婆衣四

○聖三

飛先かざるを乃あるを。此を磐垣に淵に在るうる

⑩

を云むて。人目の遠たは譬へきるあり。漢籍坤雅

露六足四翼其翹輕薄如蟬盡取蚊蟲食

⑪

王蜻直一目耳視之人故余万十卷五十九丁

おも蜻は空中残須史の間は。飛過たるさまに譬

へきるなり

右對合せみて。カギ口フ。カギ口。カギル。まゝ玉カ

キル。といふも同名を轉ト呼へるなるはきあと

⑫

残知るは

さて此虫をカギ口フといふ義を。春日日影ふよりて

見ゆるカギ口ヒ。ふるとへきる名あるは。さてその

カギ口ヒ。といふも。廣野おぼるて春の日に影ろひて。

中天は起昇る氣の見ゆるを。いふ名もて万葉集より

ぎろむの。とゆる荒野。かぎろむれ。とゆる春を。おど見

えて。漢名陽炎。遊絲野馬。おどいする。あまは。當きり。後

世よかおろふ。といふ。おれあり。寛平御時后。宮歌合は。

ときハ。流る。水。趣。を。甚。く。い。は。し。め。る。と。よ。め。る。と。月。影

の。流。水。は。臨。る。水。趣。を。甚。く。い。は。し。め。る。と。よ。め。る。と。月。影

景。よ。て。陽。炎。の。實。を。甚。く。い。は。し。め。る。と。よ。め。る。と。月。影

さま。残。陽。炎。よ。と。へ。く。カ。ギ。口。ヒ。と。い。ひ。ま。ま。カ。ギ。口

ともいむ。其をまゝ。カギル。とも轉。い。る。よ。て。カ。ゲ

ロフといふもカギロフ。成轉していふはあるは。日影
か見ゆる陽炎を後世よきてそ乃日影ははきていふ
カギロフの万葉にえをる歌どもをあまも目やを

く左に攀ふるは
○蜻火之燎留春部カギロヒノモユルハル 万十卷七丁○この歌今さらに雪
ありふー 降らぬやも蜻火はもゆる春べと

をゆとけ火をさらなり。日影ふよりて氣の起ちて

見ゆるをもいへふあは草の生むよりいなるひの

さまにさへ云ふり。蜻ハ借字ありカギロ

○炎乃春余之成者カギロヒノハルニシタル 万六卷四十二丁

炎字を書るもカギロヒ。成陽炎と書馴をるうへよ

○陽字を畧けふあは歌のうへよてれのづ 陽炎は

とゆる春はあまをあり然ときこえり

○東野炎立所見而ヒカシヌニカギロヒタツミエテ 万一卷廿二丁

朝日影ふを殊は陽炎の起しをこれなり。野をさらあ

りさて此下句反見為者。月西渡とあは。西方成かす

見まを。晨明の月れあ入らでゆる趣よて。廣野

は旅寢しゆるさまにきこゆる歌あり。上句は炎をカギロヒ

○曙乃光なりといふる説あまといひアケボノ

○蜻火之燎流荒野余カギロヒノモユルアラヌニ 万二卷三十八丁長歌

廣野を殊に陽炎の起つものあり此歌もカギ口

は蜻字茂假借あり

香切火之燎流荒野余同卷四十丁同歌或本

あはカギ口ヒをカギルヒと轉じのするふて上よ

ひるるごとく虫の名よ通じひるふと同例あり

蜻蜒火之心所燎管方九卷三十四丁長歌

カギ口に蜻蜒みよみを借り用ひたるなり陽炎は

をゆとあけとるまくら辞あり

迦藝漏肥能毛由流伊幣牟良古事記履仲天皇御歌

此を履仲天皇難波大宮よて大嘗せさをるる時

御酒は沈酔むて御眠まざるわど弟墨江中王天皇

茂弒せ奉らむとして大宮よ火を着るる茂阿智

臣さあをら御馬に乗せまひて倭國へ逃去りて

まゆし免奉りけふ間夜よ入りて河内國埴生坂よ

至まし難波北大宮の方を遙に見やらせぬふに

あほ火氣れ見えたりけむ埴生坂朕が立見まは

迦藝漏肥のゆふ家むら妻が家のあよりとよま

せぬ子流御歌おまかりさてかくよるせぬるを

難波の火氣れ遙に見ゆるに雲焼あり山氣ゆどの

臨ろひてえたる茂陽炎よ多とるさせたまふは

○かぎろふ残のげろふといふはは倭名抄に云え
 て上よひるるがごとくあるに中むろよりカゲ
 ロフといふははら一くさのも乃よのみうつ
 て呼とのごまぐありて今よれよべり。和歌童蒙抄
 に藤原範兼卿の著さきよふ書あり。あの人あり
 崇徳の御世に頃みさかりよれを志く人あり
 かちろふ残と残黒たとうばうのちひさきやうあ
 るものありと見えたるごとく。蜻蛉在林逸節用集
 草和名傳抄よ。止ム波宇。又加計呂不運歩集撮壤集
 どんどうの惣名今あべとどんどうといふは大小
 ありといふ。今あべとどんどうといふは大小
 中の一種。殊に細く千七サして黒たが秋の半ごろ

よりのいで来て中空に飛ちろふとたのひやカガ微カガむ
 らひらと見ゆるの志むしのわざに飛去るもの
 已れをの晝ハをさく見えあは朝蔭夕暮あどに
 出来るものあまあ。江戸にて兒童あどはかぬ
 好ぐ徒然草に世間ヨナカのあはた譬にかけろふの夕
 昼をまち云々といふは如く兒童を捕まて虫屋
 ふ入を置くを見ろよとくもるわざに死ぬるも
 のあり。新撰六帖にかけろふ衣笠内大臣夕くれの
 あき世ありけり。左大弁光俊はをせあり山れろ
 ふくゆふくれ。あき数まさる。おきのかけろふ
 源氏物語蜻蛉巻薫君れうへ乃につくくを思ひ

○比古婆衣四

○哭

花ぐ希あがめぬふ夕暮文上に薫君の高欄にわすれ
 りて夕のげよあるまよ花のむもとく御前此草
 むらを見こしひま乃みあをれあるに中よ
 就いて勝を断ふづの秋花天といあをるに遠ら
 のびやうに誦し居ぬへりといあをるに遠ら
 ぬ頃のかあろふのそ花をのりげあ飛ちのふを何
 文ありかあろふのそ花をのりげあ飛ちのふを何
 言とて手よをどらまばこまをあま行るもあら
 ざらえしかあろふああろあきうとまのむとり
 おちぬふとのやといあるこまあま但この歌此
 又見ゆる陽炎のあ乃虫の名よもそ乃さまあも日影
 かよふ趣よほおのあふよとどまのへてさまあも相
 きつづけくあるうあきかといまの乃獨ごちの歌にひ
 そ乃心むえをあらせてとのやと地の文又書とち
 先たあひひしらたくみ又あ地思むあもむとぞ死
 こえとる和歌六帖又世の中とあ思むあもむとぞ死

ろふのあるうなきの世よそありけきあを
 たら陽炎によきてよめあり金葉集あ懐尋い
 をいつと思ひたゆみてかげろふ此のあろふやど
 の世をひの思ひたゆみてかげろふ此のあろふやど
 炎をひの思ひたゆみてかげろふ此のあろふやど
 にありて見えぬありぬのくをりて陰後花歌ども
 ふそはら世のそ花をのりげあ飛ちのふを何
 りあをせくいはゆる黒花どうなる乃小さを此
 みいふここれおとくにあれあなる法し

○虫かきろふの古名を阿岐豆アキマの書紀神武
 卷の末に皇輿巡幸因登腋上アキマ望國狀曰云
 云雖内木綿之真途國猶如蜻蛉之醫咕焉由是始有
 秋津洲之號と云え古事記雄略段も天皇坐吳床余

○比古婆衣四

○完

條^ノ。万葉十二卷^丁廿四^ノに。三吉野之蜻乃小野^ノ。余刈草^ノ之念乱^ノ。而宿夜四曾多^ノ。とある歌を。草假字にみたり。野の蜻乃小野にかるのやの云々と。うつし書て。顯昭云。蜻をむあきつと。むあり。然まば此歌をむ。何たづの小野とよむ。ほし。うさちの小野を旁^{カタク}そのひをれあり。云々と。ひむて。蜻字をかちとよまむ。こきとなり。と。同集一卷^丁十八。ある長歌の吉野乃國之^ノ。花散相秋津乃野邊^ノ。余と何る句を。こまも草假字に書て證として。俊頼朝臣の歌云。みよし野のかたち。此小野の女郎花。たをまて露ふ心れり。是るか

たちの小野と點したる本。ふ付てよ免るなり。是は三吉野之蜻乃小野とある。蜻字をかちと點したる本に。よりて。ちみぬ。余ありと云へる。あり。さて。顯昭も。仙覺より。ちよそ。五十年。げり。前の人。あれむ。あり。論る。万葉に。點ハ。仙覺より。前の人。のちみざま。万葉のよみやうく。けり。能々見定て可詠也。一説に。付てよみ。まむ。むのこまに。ある。けり。かげろふ。乃をのちみぬる。ともあり。それも。ひをまむ。と。ひ。その。万葉に。様々のよみを。付たり。知られ。ある。まば。その。万葉に。一本に。件の蜻乃小野の蜻字を。かち。か。ゲ。口。ま。よ。免る。ら。けり。けり。然る。顯昭。其を。蜻蛉。此一名。ある。と。けり。知らざり

お見えなすゝみごとくもとはみよし野のか新續古今
たち小野に寄よみぬへるこや決し
集一に源範政今川民部大輔の集撰を一目見
かぬちの小野は刈草はほの乃まも恥ど忘さざら
恥むなど見えなすゝみ上小舉たる万葉十二卷ある
蜻乃小野余刈草之の歌をそとけたてその蜻をか
夕^〇千と點しゝ系本にたりて二三詩句をさへふと
至てよまれきり見上は舉たる万葉に玉蜻をぐ一目
えと云々などよめる趣ふやたあゆまばこれも顯
昭然論へ依と同一むのし一本まで蜻をか夕^〇千
ともよめるまこと此證とすべきなり

天地を袋縫むて云々を以てする事

蜻蛉日記安和二年秋くぐりにかくもの恥あぐら年
立のへ系朝ふありあ々乎年頃あやく世の人乃を
る言忌コトイミあどもさぬ所あねむやのうを何らむと心ね
きて心さり出るまくにいつらあく小人々今年だお
ひうよ言忌して世の中くろみむといふをききて
をらからとねわし人まど卧あぐらものきあゆあ
めつち袋袋よぬむてと誦ズするふ心寄をのしく恥り
てさらに身に三十日三十夜ミツカミツヨの我をワガとふといむむ

と云へむ。前マヘある人々笑ひて、以ヨシや思ふやうなり。公トキも侍るか。あ、同じくのおまは。残ノコのくをぬひて。殿ノミヤ兼カミ家ノふやを奉らせぬをぬと。以ヨシふよふし。つる人も起て。いとよた。やありてん。卦ゲの恵エ方ハウも勝マサらむ。わらふわらふ云。牙クハむさあ。ら書て。ちひさき人ヒト。細コトして奉まされば。此頃時の人よて。世ヨ中ノの人よて。いみづく多く。参マシり。あみ。とり。内へ。えとく。とて。以ヨシと。は。ご。の。げ。あり。なれど。かくぞある。今年を五月ふ。あ。ま。ま。ある。は。し。年。毎。よ。あ。ま。れ。な。恋。り。君。の。た。免。う。る。ふ。月。を。バ。ね。く。よ。や。あ。る。ら。む。と。あ。ま。む。い。ち。ひ。そ。の。し。と。思。ふ。

此らごりにあめつち。残ノコふくろよぬひて。と誦スした。と。以ヨシ牙クハあ。と。耳ミミふ。と。まり。て。い。の。あ。る。事コトふ。う。と。考。る。小。あ。は。當。時ツノカミ女メの。と。乃。年トシ始ハジ小誦スを。ふ。言コト壽ホギ歌カの。詞ハジメあ。り。と。ぞ。た。こ。え。た。る。然シカる。を。女房私記ニホシキと。以ヨシふ。書シ。に。卷マク首ウタ。條ジョウ政セイ所ショ様サマの。遊アソビ候ケイ寫シあり。公トキ方カタ様サマ仰オホセによりて。伊イ勢セ守ウチ殿ノミヤへ。御ミコト傳ツタへ。あ。ま。と。と。え。奥ウラ小コ伊イ勢セ和ワ都トよ。く。寫シ。得エて。兼カミ秋アキ門カド院ノを。東ヒガシ山ヤマ院ノ。天アメ皇ミカドの。后ノミコ宮ノミヤ。ま。て。享ウケ保ホ五イヒ年トシ小コ崩クズま。き。禁カギ中ノ様サマ女メ中ノ御ミコト祝イハヒの。次ツギ第ダイ。正マコト月ツキ御ミコト鏡カガミの。ち。む。祝イハヒふ。時トキ。此コノ歌ウタと。て。三ミ首ウタあ。る。末ハジメに。天アメ地ノチを。袋フクロ小縫コヌイひ。て。幸マカ残ノコ入イま。て。と。と。れ。む。れ。も。ふ。と。あ。し。と。あ。り。て。右ミダヒの。歌ウタど。も。三ミ首ウタ。ん。よ。む。べ。し。但シカし。こ。の。歌ウタ。上ウヘに。け。ふ。よ。り。ハ。我ワレを。も。ち。ひ。乃ノ。ま。に。う。み。う。ね。し。き。こ。と。を。う。つ。し。

てぞ見ふ次命とて宮位ミヤノイをまを鏡年の始小見ふぞ
うましきとありけふよりハ乃歌を後頼朝臣小見ふぞ
四年百首の中乃元日題ハ歌なりおも後よ加へ多
ふなる後命とて歌といと拙きよみま
りこれ又後加へたる歌のあふ後天地の
歌をわどりに古き言壽歌ときあえをり
えたる歌をよて歌の意を年始小袋を縫ひて一
年此幸哉入るく乃壽言ホギコトをるぐそ乃のみ風俗
ありし乃後今イマの俗に女子此春の縫始とて袋を
あるもそ遺風イノカゼある後歳徳神の備物ふすあとな
またあらで陰陽家などのけくり出さるハ正しき故實
し狭衣に今姫君の事哉以るるところも持きまへ
扇乃うちねるまゝるぐ手習をらまた乃手づのら
乃志らざにやと也かこう取見ぬへむあごそのく

志うをつゝのぬもどを乃以考をさあくあさまし
きさまあを何と見とくるうもあらぬをせち小は
そをあ免のちを袋小縫ひてと何あハ母代ハハノシロうあら
ちしあえと壽言ホギコトあ免りといるもあねあま
た天延三年の一條大納言家歌合に以しあどりの題
乃右歌小あ免つち乃袋の數しねわのまむねをふあ
とおき今日よもあ免の乃カノ誦歌をもとくあま
えれもひあをほべし又相摸集小箱根の社に百首歌
奉れる中にさいをひとふ題よて天地乃神のむろ
免むさいを袋袋ふうきてかへりてし乃結句か

一ウ箱根の書る本あるはきこ返すのとおくよめる歌
さて箱根の僧が此歌どもが返すのとおくよめる歌
どもが中より此歌にウけあてせてさいを朝日と
又そへて今より都のうさやらむとぞ木もふと
とめるも同一風俗ありけふよりてと先りとき
こえたまかくて日記の心身依趣を兼家公の通ひた
まふあと乃夜がまがちあるよあをきて今年ハ三十
日三十夜をこの許モトふ入まむと戯るひかすたるに
てその歌を天地を袋ふ縫ひて月毎に三十日三十夜
を我もとに入まむとやうに書て道綱朝臣のをさあ
りつるふをさせて夫公セギミ許ふはあたる上
能あともよつりさあがら書てとひひてその歌

をあるさい依るおろくあやあせふ書さまあり
さてそのかゝる歌をあるはとて今年も五月あとい
あまはあふ法しとてごとにあまねふ恋り君あめめ
うるふ月をむねくよああるらむ通曆もて推考ふる
是年五月に閏あ
るともかあ歌ふあらひて一年の内又閏月を置て
そ乃一月も逢はととあらむとの意にとみあ
たまふるなりさてひそとめ祝む損つと
て公があらがひふまけてひふ法き詞もあを祝ひ
損つと思ふとささむみて書とて先と依あれもま
これとろし

比古婆衣四の巻終

伴信友大人著

比古婆衣 初編 一の巻 二編 三の巻 刻成

同三編 五の巻 嗣刻 六の巻

この二の巻は古今集なるを乃そけりて喚子鳥の事より志で乃
もをさくつてあるは胡不枯校よりべのありとの事とて引り
あつたれらるるの事ども代妻しく考へたの事ハ續日本紀を撰
ぬりて中の事ども三代實録類聚西史の事ども今所義解集解
三代格政事要畧とては三鏡などその不ら學問よはして要ある
書の事ども代々しく考へたれらる陸軍ならば引よみ書か
ぶ人のとくして心ねふこと多しとる書をあり

